

高校をサボることもなく3年間通った揚げ句、卒業できなかった。青い葛藤と怠けで成績は下がり、最後の期末テストでだめならもう終わり。優秀な学友Yが心配し、毎晩勉強を見てくれた。本人は大学受験で大変というのにやさしい。

いざ試験当日。大丈夫と高をくくっていたが書けない。自覚はなかったが、後に思えば一種の神経症？

結局、数学の答案用紙には「1+1が2になるのがわからない」などと書き、他の科目もほとんど白紙。数学教師はからかわれたと激高したらしい。いたって真面目に書いたのだが通じない。点数の理由だけで、追試験も受けさせず落とすというの過去の例がなかったよつで、職員会議はもめたらしい。告げられた時、息

子は利口と勘違いしていた母親はバツタリ倒れたが、父は何も言わなかった。僕はと言えばさほどの感慨もなく、赤点パレードでは仕方ないなど。

直後、話したこともない古文の物静かな老先生に唐突に家に招かれ、とつとつと語り合い、「君の生き方がようやくわかる気がする」

### 落第生

「1+1が2になるのがわからない」と深く肯うなづいてもらった。また、春を待たずに宇和島を出る僕を駅に見送り、学校に対し憤慨しながら「お前はこんなところでグズグズせずさっさと出て行け」などと励ましてくれる英語教師もいた。この事件の渦中でいろいろな人間模様を見たが、ともかくたくさんさんの人に迷惑を掛けた。

東京に出て解放感いっぱいだったが、困ったことがあった。美術学校を受験するには高卒の資格がいる。そこで、とある高校に編入したが続かず、通信教育の学園に入り直し、1年遅れでどうにか卒業。美術学校にはすんなり合格した。



しかし、この1年の間にすっかり絵かきのつもりになっていて、学生の匂いになじめず、すぐ通わなくなつた。偉そうなのだ。以来、ひとり手探りで絵を描いてゆくことになる。

東京に出た当初、池袋にいた早稲田大に通う先輩の

下宿に居候した。その半年間、毎日のように昼間は上野の西洋美術館で過ごし、夜は池袋で百円映画を観た。学校と違い、そのリアルな刺激は大きく背中を押してくれ得難い経験となった。ここまで、なぜ個人的落第物語なんて書いたのか。思うところがあった。今、

自分の居場所を見失い、学校に通えなくなったり、世の中との接触が不器用にならざるをえない子があまりに多い。見るにつけ、聞くにつけ、痛ましい。僕らがつくった時代の子なのだ。

こつすればなどと言葉を掛ける大それた気持ちはない。だが思う。真ただ中にいて気付いてないかもしれないけれど、若い君たちはとてもきれいなんだ。だから自分に威張って！と。

(吉田 淳治・画家)